

二〇一九年二月八日

三年坂下駄の音聞く小夜時雨
目鼻なき石仏並び石路の花
石塊も仏や供花の寒蕨
浮きブイに濤いなしゐる冬鷗

二〇一九年二月七日

落葉して空の青きの並木道
小六月信楽たぬきお腹出し
田仕舞ひの煙三輪山烟らしぬ

二〇一九年二月六日

小春日や雀遊ばせ精米所
六地藏胸まで埋む菊の供花
落語家の百面相や灯の親し
小六月すべり台まで縄電車

二〇一九年二月五日

雀どち木つ葉のごとく舞ひ降りぬ
熊出ると有線放送聞く厨
秋灯し酒蔵はいまレストラン

二〇一九年二月四日

黒頭巾とれば乙女や村芝居
七五三飛び跳ねし子の光る靴

二〇一九年二月三日

行く秋や梵鐘を撞く一人旅
村重を語る集ひや城の秋
吟行子新酒に酔ひて伊丹郷
懐に棚田を抱き山粧ふ
夕茜残る御空に二日月

二〇一九年二月二日

路地親し尽きぬ小春の立話
渦見舟特等席は潮かぶり
疎に花をつけて満開冬薔薇
秋声や千年眠る古墳より

毎日句会みのる選・二〇一九年二月一日

みづき	宏 虎	うつき	素 秀	満 天	菜 々	明日香	うつき	小 袖	菜 々	たか子	ぼんこ	やよい	小 袖	せいじ	なつき
そうけい	うつき	うつき	ぼんこ	はく子	菜 々	せいじ	たか子	はく子	せいじ	たか子	はく子	ぼんこ	やよい	せいじ	なつき